

さて、この度、東京都千代田区神田錦町にある天理ギャラリーで第一二三六回展「モノスーンアジアの竹文化—素朴な技術と造形の美—」(会期:二月一六日～三月二八日)を開催する。天理ギャラリーは、天理大学附属天理図書館および附属天理参考館の両館に収蔵する稀覯書や世界の考古美術・生活文化資料からテーマをきめ、年二回の展観をおこなつてゐる。今回の展観では、広大なモノスーンアジアの内、比較的竹がたくさん生い茂る東南アジアの島嶼部、大陸部東側、中国

1)に掲げる通りである。
展示資料のバリエーションからも察せられるよう、モンスーンアジアの人びとにとって身近に見られる天然素材である竹はじつにさまざまな場面で利用されている。竹作りの器に人間が入つて暮らすなど、わたしたちには考えもおよばないところだが、二〇世紀前半の台湾で竹作りの寝台に入つて眠るライフスタイルがあつた。蒸し暑い夏の夜、涼をとるためにまさにまさる寝台はなかつたであろうと思われる。

(表1) 天理ギャラリー第136回展「モンスーンアジアの竹文化—素朴な技術と造形の美—」(会期: 2月16日～3月28日)
展観概要

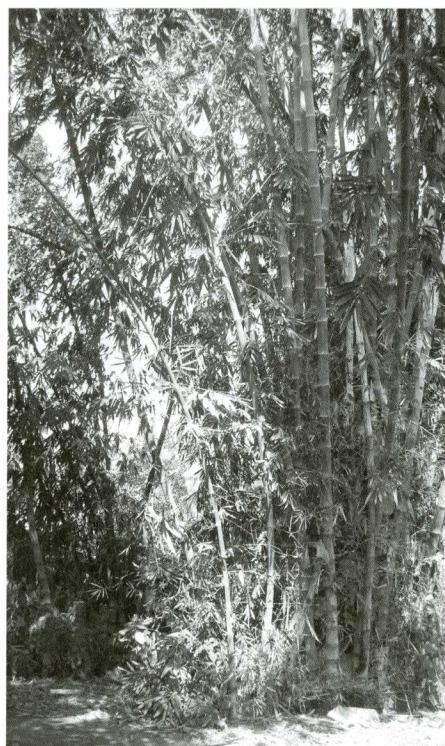
コーナー	エリア	主な展示資料(地域)
プロローグ		
1.モンスーン アジアの竹と生態		竹の切り株(インドネシア、日本)
2.竹製品の用途と広がり		
3.モンスーン アジア各地の 竹を使う文化・ くらし	a 素材・技術の活用	竿/竹煙管(台湾)、 竹節/びんろう嗜好用容器(インドネシア)、 竹管/豎笛(インドネシア)、 割竹/背負い具(ラオス)、 へぎ/提げかご(中国)、ひご/虫かご(中国)、 竹片/四つ竹(台湾)、 竹漉紙/額につける雑面(タイ)
	b 人、生き物が入る	竹作りの寝台(台湾)、御殿形虫かご(中国)、 閻鶏用の鷄かご(インドネシア)
	c 物を入れる	飯かご(ラオス)、竹筒の水筒(インドネシア)、 蓋つきの掛け籠(中国)
	d 身に着ける	亀甲形の雨具(台湾)、笠(ラオス)
	e 音を鳴らす	横笛(中国)、笙(タイ)、竹排琴(タイ)、 すずめ骨し(インドネシア)
	f 日常の道具	竹製の調度品を配した宴席(台湾)、 竹たわし(中国)、扇(マレーシア)、
	g 日常の道具	竹筒の麿(インドネシア)、 十二神将図符(タイ)
4.竹への回帰		猛獣製の皿(インドネシア)、 竹編みの丸盆(インドネシア)
総展示点数	89点	

モンスーンアジアの 人びとと竹

では、夏(雨季)のモンスーン(季節風)である。夏のモンスーンは、ヒマラヤ山脈にぶつかると大きく東に進路を変える。水蒸気を多く含んで重くなつた空気の一部はヒマラヤ山脈にぶつかって分厚い雲を作り、アジア平野部の各地に大量の雨を降らせ、それまで乾季だったアジアの各地に雨季をもたらせる。

は、インドから東南アジア、中国南部、東アジアの太平洋沿岸まで大きく広がっている。この広い範囲がモンスーンアジアだが、南部は高温多雨な熱帯モンスーンに、ベトナム北部あたりから北は温暖な温帯モンスーンにわかれている。

モンスーンアジアの各地では古くから稻作が発達し、多くの人口を養ってき



竹作りの寝台“竹眠牀（ティエクビンツン）”（台湾、20世紀前半）
涼をとるには最高の寝台だった。阿片吸引や日中の仮眠に使ったとも伝えられている

This image shows a round, woven basket or container. The top half features a light-colored, diamond-shaped woven pattern, while the bottom half has a darker, more solid woven texture. A dark, possibly leather, strap is attached to the top edge of the basket. The basket is set against a plain white background.

飯かご“ティップカオ”
(ラオス、21世紀)
通気性がよく、モチ飯
(強飯)の収納には最
適の容器

すずめ脅し“ピンジャンカン”
(インドネシア、バリ島、20世紀後半)
風車の回転とともに竹を叩く仕組みになっている。竹を叩く音色で稻米を食べる
すずめを脅すのに用いられた

コオロギ相撲のリング
“蟋蟀闘籠(エクスツットウロン)”
(中国、20世紀前半)
むかし、中国の男たちは、コオロギを闘わせその強さを競つたり、餌育箱の芸術性と虫の音色を楽しむ文化に魅せられた。リングの下ではコオロギが闘い、リングの下では一攫千金を夢見る男たちが火を焚かせらしていた



竹の容器は物や水、酒などの液体を入れるだけではなく、小鳥や虫、二ワフトリ、サカナなどを飼育し、捕らえる器にもなっている。また、人が身につける笠や雨具などにも竹素材のモノが見られる。音色を楽しむ楽器や小鳥を育したり、おびき寄せる道具、その他、竹を使った日常の用に使う道具はなるほど感じるモノばかりである。そして、人びとにとつて非日常の世界とみなされる神々との交信や精神世界にかかる道具にも竹は登場する。

なモノである。それゆえに短いスパンの再生産が必要となり、編み細工の技術や手細工の技術の継承が逆にスムーズにおこなわれてきたのではないだろうか。わたしたちを含むセンスーンアジアの人びとの生活感性を再発見しようととした場合、その気候風土に育まれた竹素材の活用状況や製作技術の継承方法を知ることは、大いに有用であり、これからも少ないと感じての快適な暮らしのあたり方を模索するヒントのひとつになるかも知れないと感じて



株立ちの巨竹(インドネシア・バリ島)